

先輩に学ぶ！理想と現実のギャップ

日本社会事業大学 社大福祉フォーラム 運営委員会及び企画委員会

| | | | |
|-------|------|-----|----|
| 代表執筆者 | 学部2年 | 橋本 | 梓 |
| 共同執筆者 | 学部2年 | 小畑 | 葵 |
| | 学部2年 | 石川 | 晶 |
| 企画担当 | 学部3年 | 佐久間 | 翔一 |
| | 学部2年 | 荒川 | 和紀 |
| | | 賀陽 | 聞思 |
| | 学部1年 | 内本 | 庸司 |
| | | 高橋 | 夏美 |

はじめに

日本社会事業大学社大福祉フォーラム運営委員会及び企画委員会（以下 学生委員会）は日本社会事業大学の学部生の目線に立って自主企画を運営するほか、学内学会全体の運営実務に携わることがを目的として、2014年度学内学会より発足した。学生委員会は学生による学生のための自主企画をもって、本学学生の社大福祉フォーラムへの参加を促し、学生が普段より研究していることや思考思索していることを発表する場を作ることを目指している。

学生委員会は昨年末より、本学学生が将来福祉専門職として活躍できるためには何が必要かという議論を繰り返してきた。委員それぞれが普段感じていることや、講義を受けて考えたことなどを持ち寄り話し合った。その中で比重の大きかった意見が2つある。一つは、本学は単科大学であるため、他大学と比較しても人とのかかわりが狭くなりがちであるということ。もう一つは、普段の講義を受けるだけでは、自分が福祉職として働くビジョンが見えにくいということであった。これらの点について補っていくために、学生の自主企画では何ができるのだろうか。委員の間でさらに話し合いを深めていったところ、実践現場で活躍されている本学OBをゲストスピーカーとして招

き、交流をもちたいという意見が上がった。そうして発案されたのが本企画、「先輩に学ぶ！理想と現実のギャップ」である。

本稿では、社大福祉フォーラム2015の2日目において実施された学生委員会主催の自主企画「先輩に学ぶ！理想と現実のギャップ」について報告する。

1. 企画の目的

大学などの高等教育機関における福祉教育には、福祉について広範な知識と福祉的観点を身に付け社会生活上で役立てるための教育と、ただ広いだけでなく、深い知識と技術を身に付け福祉専門職として活躍する人材を育てるための教育がある。日本社会事業大学は後者にあたり、在学する学生は福祉専門職としての知識や技術の習得に励んでいる。しかし普段の講義をどんなに真剣に聞いていても実際の福祉の現場のことをリアルにとらえるのは難しいだろう。この企画では、実際の福祉の現場で働く卒業生との交流を通して、学生自身が気づきを得ることをめざす。

今回は支援対象別に子ども、高齢者、精神保健福祉の分野でそれぞれ活躍されている卒業生を招待し、ケーススタディの形をとって学生と議論を交わしてもらった。ある事例について学生が考えたことを、卒業生や他の参加者と共有し深めていく。学生と卒業生との交流によって、それぞれの考え方の差を実感してもらおうと考えた。

2. 実施概要

交流は2015年6月28日の13時から15時、社大福祉フォーラム2015自主企画内で行われた。場所は日本社会事業大学清瀬キャンパスのC301、C303、C304の3教室を使用した。

今回は取り扱う事例の分野ごとに、子ども、高齢者、精神保健福祉の3教室に分割して実施した。

教室ごとに5～6人の小グループを作り、簡単な自己紹介を経て事例の検討に移った。具体的には以下の流れで交流を行った。また、記載した時間はおおよそのものである。

- (1) 進め方の説明 (15分)
- (2) 自己紹介 (10分)
- (3) 事例の説明 (15分)
- (4) 個人での検討 (15分)
- (5) グループでの検討 (40分)
- (6) 全体での共有 (15分)
- (7) まとめ (10分)

各分野の事例は配布資料と口頭で説明を行った。各教室の当日の配布資料をそのまま添付したのをご参照いただきたい。(参考資料1～3)はじめに各個人で自分の意見をまとめたのち、小グループで議論を深めた。最後には教室全体で議論の内容を共有した。最後には学生と卒業生それぞれに感想を発表してもらい、アンケートの記入をお願いしてプログラムを終了とした。

3. 招待したゲストスピーカーについて

今回は4名の卒業生をゲストスピーカーとして招待した。子ども分野には氏家真純氏、高齢者分野には佐藤衣果氏、精神保健福祉分野には若松みや氏を招待した。3名とも、2009年度の学部卒業生である。氏家氏は社会福祉法人厚生福祉会に所属し、現在は保育士としてかつしか風の子保育園にて勤務されている。佐藤氏は大学卒業後、特別養護老人ホームや認知症対応型共同生活介護(グループホーム)等高齢者分野での勤務を経て、現在は障害者支援の分野で活動されている。若松氏はNPO法人このほに所属する精神保健福祉士である。また、分野の垣根を超えた意見交流のためにもう1名のゲストスピーカーに藤野将睦氏を招待した。藤野氏はビーサイドユー株式会社代表であり、重度訪問介護を含む在宅介護を中心に幅広く事業を展開されている。

4. 当日の様子

- (1) 子ども分野の当日の様子

プログラム参加者は学部1年生が2人、2年生が3人、ゲストスピーカーの卒業生が1人であった。

グループ設定、自己紹介、事例の説明、個人での検討、グループでの検討、まとめの順に行った。

人数がそれほど多くなかったためにグループわけはせず、全員で検討を行った。アイスブレイクを兼ねた自己紹介では、名前、学年、志望課程などをそれぞれが話して場の緊張感をほぐした。

それ以降は司会とゲストの卒業生が場を進めた。はじめに事例資料の読み合わせを行い、質疑応答の時間を設けた。その後、個人で考察する時間を経て、全体での検討へと移った。

今回取り扱った事例は、ややADHDの傾向が見受けられる幼稚園児の事例である。(参考資料1)ほかの園児や担任の先生に強くあたってしまうAくんへのかかわり方について考えた。

グループが1つしかなかったため、個人での検討の時間とグループでの検討の時間を他の2つの分野よりも多く配分した。

グループでの検討の際は、まず個人で考察した意見を発表し、ゲストスピーカーの卒業生の意見も聞きながら議論を深めていった。少人数だったということもあり、比較的早い段階からグループのメンバーで打ち解けることができた。

意見をまとめる際にはあらかじめ用意したA4用紙を用いて、Aくんを取り巻く要素を分析し、想定されるかかわり方を記述した。

出た意見には次のようなものがあった。まずAくんに対する保育者としての態度について、Aくんに限らず、上から抑圧されるような怒られ方をすると自己イメージが低くなり、自分にできること・自分の強みを見出せなくなってしまうことがあるので、Aくんが悪いことをしたときにも怒るというよりは毅然とした態度で伝えることに気を付けるべきであるというもの。そもそも叱る雰囲気を作るべきではないということ。Aくんがよいことをしたらひとつひとつに「ありがとう」を伝えること。一緒に何かしらの活動をしてプラスの経験を共有すること。また、近所の住人など第3

者への働きかけも視野に入れる意見も上がった。

ゲストスピーカーからは「その子がどうやったら幸せに暮らせるのか考えることが大切。」「様々な視点での意見が出ていてとてもよい検討会だった。自分にはない意見も大事にして、様々な視点を広げていってほしい。」とのコメントをいただいた。

参加者からは「内容の濃い議論ができてよかった」「思った以上に楽しかった」等肯定的な感想があがっていた。

(2) 高齢者分野の当日の様子

プログラム参加者は学部1年生が5人、2年生が2人、3年生が1人、ゲストスピーカーが1人であった。

子ども分野と同様にグループ設定、自己紹介、事例の説明、個人での検討、グループでの検討、それに加えて全体での共有、まとめの順に行った。

グループ設定は、人数の都合上はじめは1グループで設定していたが、途中から入場して参加者数が増えて以降は2グループに分割して検討を行った。

自己紹介を行ってから検討に入ったが、緊張感が強く、グループが打ち解けるためには時間がかかった。この緊張感はグループでの検討まで継続した。

今回取り扱った事例は、支援者に生活について困っていることを強く訴えない一人暮らし高齢者の事例である。(参考資料2) 心筋梗塞の罹患歴があることや、頻繁に起こる転倒事故など不安になる要素を多く持ちつつも、困ったことについて訴えないSさんに対してのかかわり方や、今後の支援について考えた。

グループでの検討では、はじめは各グループに入ったスタッフが進行したが、途中からグループ内から自主的に進行役になる学生が出てきた。学生のみで進めた話し合いの中では、おもにクライアントの生活上の課題や支援方法について話合っていた。ゲストスピーカーがグループに入ると、ゲストスピーカーの質問によって新たな視点

から議論がすすんだ。

話し合いの内容には2つのグループ間でも大きく違いがみられた。一方のグループではクライアントの幸せとは何か、ということについて考えた上で、施設による支援と在宅による支援の二つについて検討した。もう一方のグループではクライアントのできていることとできていないことについて考え、施設による支援と在宅による支援について検討した。

Sさんの幸せとは何かというところに焦点を当てた議論では、Sさんの幸せとして、他者とかかわること、けがの防止、畑の手入れなどがあがった。そしてそこから考えた解決すべき課題として、一人暮らしが難しいこと、度重なるけが、地域との交流が少ないことなどが挙げられた。支援には、施設と在宅生活の継続の2つが挙げられた。施設のメリットは、安全性の確保があがった。デメリットには畑づくりに取り組むことが困難になることがあがった。在宅のメリットには畑づくりができること、デメリットにはヘルパー不在時の安全性が挙げられた。

グループのメンバーは全員が意見を述べることでできていた。また、参加者それぞれが自分の学習について課題を見出していたようである。1年生は介護保険制度など高齢者福祉に関する知識が不足していることにギャップを感じていたようであった。上級生は大学で学んできたことを実際に生かすことにギャップを感じていたようであった。

議論を経て深まったグループ内の意見を全体で共有するために、黒板に議論の結果を書き、グループごとに学生が発表した。前述のようなグループ間での議論内容の差を知ることができた。

ゲストスピーカーからは「まずはクライアントにとって何があれば幸せになれるかを考え、その上で理想に近づけていくためにはどのような支援が必要か考えることが大切である」とのコメントをいただいた。

参加者からは「少し内容は難しかったが、楽しかった」「講義で学んだことを実際にどう使って

いくのか経験できて良かった」といった感想を多数もらった。

(3) 精神保健福祉分野の当日の様子

プログラム参加者は学部生が5人、外部からの参加が1人、ゲストスピーカーが1人であった。

高齢者分野と同様にグループ設定、自己紹介、事例の説明、個人での検討、グループでの検討、全体での共有、まとめの順に行った。

全体を2グループに分け、プログラムを開始した。自己紹介をアイスブレイクとしたが、いずれの参加者も緊張気味で、静かであった。個人で検討してもらったことを出し合うときも、緊張が解けない様子であった。

進行は各グループに入ったスタッフが行き、グループでの検討を開始した。

今回取り扱った事例は、度重なる社会的トラブルや入院を経験している精神障害者の事例である。(参考資料3)過去に法に抵触する行為を行ったこともあるMさんの社会復帰について考えた。

グループでの意見交換では2つのグループの間で進み方に違いがあった。学生のみグループはお互いの意見を出し合い、どのように発表に持っていかについて話し合いながら進めていった。途中、ゲストスピーカーさんからアドバイスをもらい、グループでは出てこなかった新たな視点が見えてきて議論が盛り上がった。グループディスカッションをしてから、誰か一人がしゃべってしまうなどなく、全員が参加することができていたように見受けられる。あらかじめ用意されていた用紙を使つての発表はせず、口頭で発表を行った。

外部の方のいるグループは様々な意見が出ていたが、なかなかまとまらず、ゲストスピーカーさんがまとめるといふ形になってしまっていた。しかし学生のみグループに比べて、ディスカッションは活発であった。参加者ひとりひとりがきちんと自分の考えを述べていた。発表時は学生のみグループと同じく口頭での発表を行った。

議論で出た意見には様々なものがあつた。今後の支援策に焦点を当てて、断酒会への仲介、糖尿

病の治療の優先などの意見が上がつた。また支援者としてはじめに何をすべきか、という点に焦点を当てて、“まずは家庭状況の把握が必要”とする意見があり、そのうえで飲酒、睡眠薬、過去にしてしまったことの原因を探るべきだという参加者もいた。しかし、その意見に対しては、原因を探ることの意味を疑問視する意見を出した参加者もあり、多様な視点からの議論が進んだ。

ゲストスピーカーさんの「本来事例検討とは、クライアントがその場において初めて成り立つものであり、その人の状況を考えることも大切であるが、クライアントさんがどうしたいか、その心情に寄り添うことが最も大切である」というコメントを聞き、学生の参加者はそこにギャップを感じていた様子であった。

企画終了後、感想を聞くと、難しかったが楽しかったとの声が多数。普段の座学では学べないことを学べた。他人の意見を聞き、そのような視点もあるのだ、と勉強になったといっていた。また、終了時刻が過ぎてもゲストスピーカーさんと話す参加者もいて、この企画を本当に楽しみ、精神分野の実際に興味を持った参加者が多くいたことがわかつた。

5. アンケート結果

(1) 集計結果

プログラムの最後に、本企画の目的である“実践のイメージを知ること”が達成できたかどうか等を調査するため、参加者にアンケート用紙への記入をお願いした。実際に配布したアンケート用紙は参考資料として添付した。(参考資料4)

以下はその集計結果である。単位はすべて人である。

問1 アンケート記入者情報

| | | | |
|---------|----|----|---|
| (1) 社大生 | 17 | 1年 | 8 |
| | | 2年 | 8 |
| | | 3年 | 1 |
| | | 4年 | 0 |
| (2) 他大生 | 0 | | |
| (3) その他 | 1 | | |
| 計 | 18 | | |

表1

問2 今回参加した企画の分野について

| | |
|------------|----|
| (1) 子ども | 5 |
| (2) 高齢者 | 5 |
| (3) 精神保健福祉 | 8 |
| 計 | 18 |

表2

問3 今回の事例検討会を通して、実際の支援についてのイメージが以前より明確にできましたか。

| | |
|---------------|----|
| (1) できた | 12 |
| (2) まあまあできた | 5 |
| (3) あまりできなかった | 1 |
| (4) できなかった | 0 |
| 計 | 18 |

表3

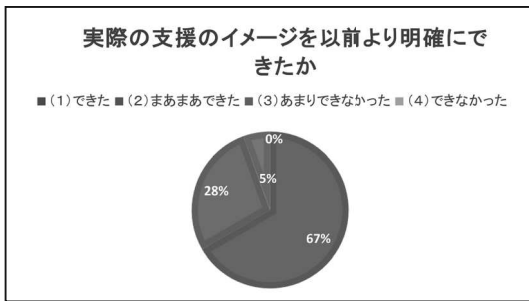


図1

問4 本日の内容の難易度についてお聞かせください。

| | |
|-------------|----|
| (1) 難しかった | 5 |
| (2) やや難しかった | 9 |
| (3) ふつう | 2 |
| (4) やや易しい | 0 |
| (5) 易しい | 1 |
| 無回答 | 1 |
| 計 | 18 |

表4

問5 今回の企画は満足できるものでしたか。

| | |
|---------------|----|
| (1) 大いに満足 | 13 |
| (2) まあまあ満足 | 4 |
| (3) あまり満足ではない | 1 |
| (4) 満足ではない | 0 |

表5

問6 今回の企画の感想、改善点などございましたらご記入をお願いします。(自由回答)

・もっといろんな人と話してみたいです。想像力

をどんどん鍛えていくために頑張ります。

現場の方からの助言で考えの幅が広がりました。

- ・今まで支援策として考えていたことは、支援者のエゴというか支援のしやすさを重視してしまっていたのだと気づかされました。とても楽しかったです。
- ・事例検討において実際に働いている人と私たちではやはりギャップがあり、それを聞くことができてよかったです。
- ・スタッフの皆さまお疲れ様でした！実際に働いている人のお話を伺えたのはとてもいい経験になりました。勉強になりました。本当にお疲れ様でした！
- ・学生だけのグループでしたが、普段勉強したこともまじえつつディスカッションができて、あまり緊張しないでできたのが楽しかったです。先輩方や経験の豊富な方の意見も参考になりましたが、自分たち（学生）での新たな発見もありました。学会の皆さんお疲れ様でした。
- ・元々ディスカッションという自分の意見を出さなきゃということで少し苦手意識があったが、少人数グループでのディスカッションを行う事によってほかの人の意見や考え方をたくさん聞くことで自分でも勉強になることがたくさんあった。
- ・とてもとてもとても！楽しかったです。司会も完璧でした！ゲストさんが優しく、話しやすく、リラックスした空間で事例検討していました。
- ・ゲストの方の話を聞いて的確な意見をもらえるのがよかった
- ・子どもについて何も知識がなくてまともに話せるか心配だったけど、先輩方の意見を聞いてとても勉強になりました。
- ・楽しかったです。もっと現場の先輩方のご意見や”ギャップ”の部分を知りたいなと思いました。
- ・思ったより面白かったです。またこういう機会を作ってほしいなと思いました。

(2) 考察

アンケート結果の考察として、問4において事例やディスカッション等の企画の難易度について、「難しかった」「やや難しかった」と回答した参加者が合わせて14人いたのに対して、問5の企画の満足度についての項目では「大いに満足」に回答した参加者が13人「やや満足」に回答した参加者が4人と、合わせて17人の参加者が企画に一定以上の満足感を得ていたことがわかった。この17人という数字は今回の企画の参加者のほとんどを占める数字である。企画が難しかったと感じる回答が多かったのは、今回の参加者に学部1年生と2年生が多かったことと、学部1・2年生にはまだなじみのない、事例を用いた学習であったためと考えられる。しかし満足度の高さや自由回答で今後の学習への意気込みを含んだ意見があったということを見ると、自分のレベルより難しい課題に取り組んだからこそ、自分のレベルとのギャップに気づけたということがいえる。

また、問3の実際の支援のイメージを以前より明確にできたかどうかという設問に12人の参加者が「できた」と回答した。円グラフ化して百分率で表したところ、これは全体の67%にあたるものであった。参加者の多くが、今回の企画で得られた自分の意識の変化について自覚的であることがわかった。

アンケートの自由回答でも「また同じような機会を作ってほしい」という意見があり、今回の交流に対して前向きな意見が多く見られた。

6. 総括

今回このような現場で活動されている卒業生と交流できる機会を設けて、学生は自分自身のイメージと現場の方の話のギャップを実感することができたと考える。参加者ひとりひとりが自分の持っていた現実のイメージとはどんなものなのか知り、卒業生からの話や他の学生の意見を聞き、新たな視点や価値観を得ることができた。また、

ご協力いただいた卒業生の方々からも、今回のプログラムについて今の学生の考えていることを知ることができて新鮮であった等の肯定的な感想をいただいた。非常に有意義な時間を過ごしていただけたのではないかとと思われる。

また今回の交流およびケーススタディを通して、学生が自分たちの力で学習の場を作り、自分たちの力で新たな気づきを得ることの重要性にも注目すべきであると考え。それを絶やさず継続していくことも大切だろう。今後も自発的な学習のための機会作りに努めていきたい。

学内学会 事例検討 子ども分野

～幼児への今日的な「かかわり方」をどうとらえるか～

氏名：A君
年齢：4歳
性別：男

性格特性：やや強情でわがままな傾向が見られる。ややADHDの傾向あり。
(※医師による実際の診断なし)

事例：

ある幼稚園の4歳児(以下Aくんとする)は、自分の思った方向へ衝動的に一直線に走っていくため、その線上で遊んでいる友だちの遊具を蹴散らしてしまう。そして、友だちにとがめられると容赦のない攻撃行動に移る傾向にある。砂場でプリンのカップに小便をして、教師に「おしっこはどこでするんだっけ?」と指摘されて、その小便を教師にあひせかけようとしたこともあった。

子どもの「わかりにくさ」は、「なぜそんなことをするのだろう」「なぜ、その程度のこととこんななにされるのだろう」というわかりにくさとも言える。指導する保育者の立場からすると、「話しても伝わらないのはなぜだろう」という分かりにくさでもある。乱暴があったとき、子どもと保育者との関わりとして、次のようなやりとりがよく見られる。Aくんがトイレに行く途中でBくんをたたいたり、首をしめたりという乱暴を行う。保育者はAくんの動きを止め、ゆったりと声をかけた。

保育者「Aくんは、なにかたたく理由があったのかな?」

Aくん「うん。」

保育者「Aくんもたたかれたらいやだよね。」

Aくん「うん。」

保育者「Bくん、とっても痛かったよ。あやまろうか。」

Aくん「うん。ごめんね。」

しかし、Aくんはすぐに同じことを繰り返していく。言い聞かせたとしても次の瞬間には同じ事を繰り返すため、保育者は対応に苦慮していた。もし保育者の口調が少しでも強かった場合は、泣き叫んで耳をふさいだり、「あっかんべー」をして横を向いて保育者と目を合わせなくなったり、「もう お家へ帰る。保育園にはこない」というような 悪態をつくことにもなる。担任保育者と他の保育者に対して、異なる振る舞い方をするため、Aくんへの対応に困っている。保育者はAくんへのかかわり方について考えている。

事例の流れ：

- 以前から問題行動を度々行っていたAくんが他のこどもに対し乱暴な行動を取った。
- 保育者がAくんの動きを止め言い聞かせをし、理由を聞き、他の子どもにも謝らせた。
- Aくんは再び同じような行動を繰り返す。
- Aくんは強く注意してしまおうと悪態をつき、他の保育者に対し異なる振る舞いを取るこがある。
- 保育者はAくんに対しての対応に困り、かかわり方について考えている。

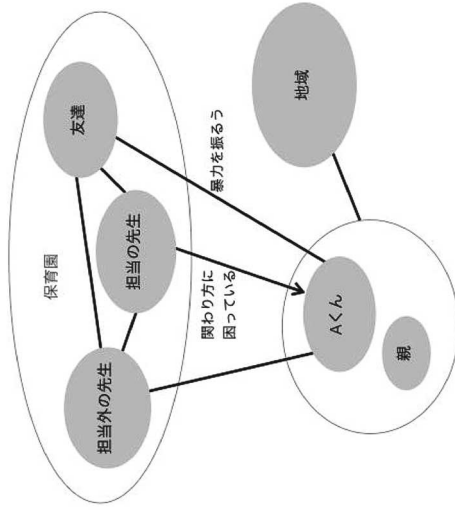
用語解説：

・ADHD・・・注意欠陥・多動性障害。多動性、衝動性、注意力を症状の特徴とする発達障害もしくは行動障害のこと。

参考文献： ・月刊「保育情報」No. 276

・子どもの「変化」と保育実践 全国保育団体連絡会 草土文化

より



学内学会 事例検討 高齢者分野

～困ったことを強く訴えない当事者とのかかわり方～

氏名：Sさん

年齢：87歳

性別：男性

要介護度：介護認定申請中

ADL：屋外では杖があれば、ゆっくりと歩行ができる。市営住宅の入り口の2段は杖で移動ができる。排泄は紙パンツや布パンツを使用している。尿失禁もあるようで、尿臭あり。入浴は元気な時はバスで中央老人福祉センターに行き入浴をしていたが、現在は不明。食事の摂取は、飲み込みも含めて問題ない。

事例：ある病院のケースワーカーから連絡があった。昨年、中央老人福祉センターで倒れ、心筋梗塞で入院中の一人暮らし男性のSさんについてである。Sさんは結婚歴がなく、交流のない甥が緊急連絡先となっている。病院でSさんと面接するが、困ることは?と聞いても「うーん、ない」と言う。状態が落ち着いて、退院することを民生委員に連絡し、退院日の次の日に訪問した。室内も台所も物が散乱していたが、Sさんは「ヘルパーはいらない」という。とりあえず困った時に連絡もらえるよう連絡先を交換した。

それからしばらくして病院から「Sさんが通院していない」と連絡があったため、受診を勧めに訪問をした。自宅の掃除はしていない様子であった。

1か月後、Sさんは転倒し、大腿部頸部骨折で入院。「水道凍結が心配だ。」と言い、病院職員と元栓を閉じて留守宅に訪問した。室内は散乱がひどくなっていた。

その3か月後、支所で「トイレにスリッパが詰まった」と訴え、業者に連絡してもらった。トイレの中にスリッパが入っていたが、詰まっていたのは紙パンツだったとの事である。

3か月後、再び転倒し左顔面内出血になった。Sさんは何度が転倒しているようである。民生委員さんからは「一人暮らしに不安になり施設入所も考えているようだ。」との情報があった。生活保護担当に相談すると、養護老人ホーム入所予定なら年金で入所できるとの事である。Sさんに養護老人ホームの入所の意思確認をすると、「今年はそのように思っているが、本人が申込書記入する。診断書のための病院受診を勧めても返事がないので連れていった。」

1か月後、Sさんは屋外で転倒し、骨折はなかったが入院した。この入院の時に介護認定

申請をすすめた。リハビリを行い杖歩行ができるようになり退院した。それから再び養護老人ホーム入所の話を持ちかけた。Sさんは「面倒みてくれる人がいるのでまだ入らない。」とのことであった。

Sさんは不安を抱えながら生活しているにもかかわらず、あまり表に出そうとしないという。Sさんが安心して生活するためにはどのような支援が考えられるか。また、Sさんどのような関わり方をしていけばよいだろうか。

事例の流れ：

一人暮らしに不安を抱えている入院中のSさんと面接を行うも、困っていることは「ない」との回答

→その後、Sさんは転倒による入院を繰り返し、生活状況も悪化する

→Sさんが施設入所の意思を見せたので、申込書に記入してもらう

→転倒により再度入院すると、介護認定申請をすすめ、退院後、再び施設入所を持ちかけるもSさんは「まだ入らない」とのこと

→不安を抱えながらも表に出そうとしないSさんにどのように関わり、どのような支援をしていけばよいだろうか。

用語解説：

・介護認定・・・介護保険制度では、寝たきりや認知症等で常時介護を必要とする状態（要介護状態）になった場合や、家事や身支度等の日常生活に支援が必要であり、特に介護予防サービスが効果的な状態（要支援状態）になった場合に、介護サービスを受けることができ。介護認定は、介護サービスの必要度（どれ位、介護の段階あり、数字が大きくなるほど必要度が高い）。（厚生労働省HPより）

・ADL (Activities of Daily Living)・・・日常生活動作。日常生活を営む上で、普通におこなっている行為、行動のこと。具体的には、食事や排泄、整容、移動、入浴等の基本的な行動をさす。リハビリテーションや介護の世界で一般的に使われている用語の一つで、要介護高齢者や障害者等が、どの程度自立的な生活が可能かを評価する指標としても使われる。（介護応援ネットHPより）

参考文献・URL：北海道滝川市HP（H27.6.25参照）

http://www.city.takikawa.hokkaido.jp/200soumubu/01soumu/01soumu_g/03shingikai/kaigofukusi/tuikicare.html

学内学会 事例検討 精神保健福祉分野
～精神障害者の社会復帰について～

氏名：M・M（五十一歳）
性別：男性

病名：抑うつ状態、精神薬、アルコール依存症、糖尿病

事例：

M・Mは、七人兄弟の長男として出生。小学校卒業後、管内において巻網漁業の漁船員として働く。船に乗り始めて数年後に飲酒が始まる。

常陸したY県で飲酒のうえ、通行人と口論、当人を殺し服役七年の刑を受け服役する。仮釈放され母のもとへ帰郷、再び漁船員として働くが同僚と口論し下船、以後職を転々とす。また、その後傷害事件を起こし再び服役する。出所後再び帰郷し、漁船員として住込みで働くも続かず全国各地を船員日雇等として転々と働く。そして、このころから睡眠薬を服薬するようになる。

帰郷し、母・妹と同居するも、直ぐ母と口論しT県へ転出、睡眠薬自殺を図り入院。その後、意味不明のことを口走るなど精神的異常が認められたので、精神病院に転院。同年、精神病院を退院して帰郷、漁船員として働くも、船長とトラブルを起こし、再び自殺を図り、管内のB病院へ入院する。翌日、妹から生活保護の相談があり、保健所の精神衛生クリニック受診を助言、受診したところA精神病院へ入院となり、生活保護適用となる。

本日はM・Mさんが社会復帰していくにはどのような支援が必要か皆さんと考察していきたい。

事例の流孔：

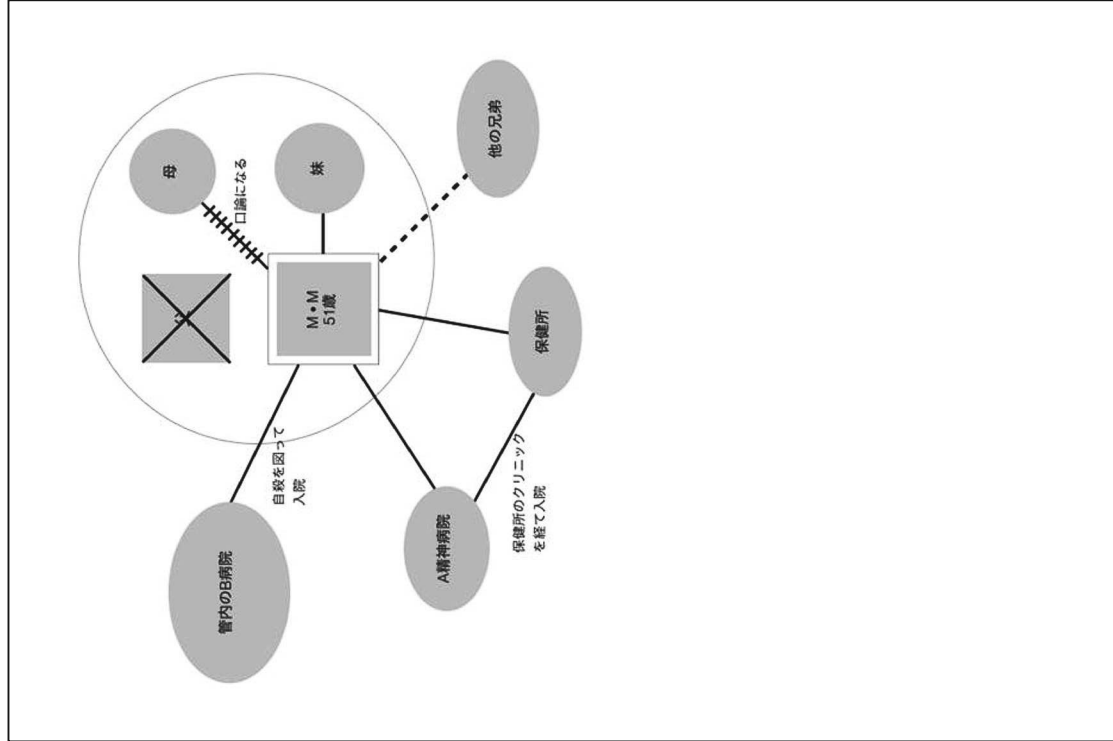
- M・M七人兄弟の長男として出生。
- 小学校卒業後管内において巻網漁業の漁船員として働く。
- 船に乗り始めて数年後に飲酒。
- 常陸したY県で飲酒の上、通行人と口論、当人を殺し服役七年の刑を受け服役。
- 仮釈放され母のもとへ帰郷、再び漁船員として働くが同僚と口論し下船、以後職を転々とす。
- 傷害事件を起こし服役し、出所後再び帰郷。漁船員として住込みで働くも続かず全国各地を船員日雇等として転々と働く。
- 睡眠薬を服薬するようになる。
- 母・妹と同居するも、直ぐ母と口論しT県へ転出、睡眠薬自殺を図り入院。その後、意味不明のことを口走るなど精神的異常が認められたので、精神病院に転院。
- 精神病院を退院して帰郷、漁船員として働くも、船長とトラブルを起こし、再び自殺を図り、管内のB病院へ入院する。翌日、妹から生活保護の相談があり、保健所の精神衛生クリニック受診を助言、受診したところA精神病院へ入院となり、生活保護適用となる。

用語解説：

- ・生活保護・・・生活に困窮する方に対し、その困窮の程度に応じて必要な保護を行い、健康で文化的な最低限度の生活を保障するとともに、自立を助長することを目的としている（引用：厚生労働省HP）。
- ・保健師・・・公衆衛生のため、都道府県及び政令指定都市が各地区に設置する機関。医師・保健婦等が設置され、住民の健康相談・衛生指導・栄養改善にあたり、また社会衛生上の試験や検査、疾病の予防に努める（引用：広辞苑）。
- ・精神衛生クリニック・・・神経症・糖尿病、アルコール中毒その他を予防し、それらの病気の早期発見・保護・早期治療・再発予防等を目的とする場所。
- ・精神選遊・・・知的機能が平均より明らかに低く、年齢に応じた行動がとれず、それが成長期に現れたもの。（18歳未満）学習や知的な作業、身辺の整理、社会的な生活が送れない状態のこと。

参考：

- ・「生活と福祉 別冊事例集 アルコール依存症および精神障害者特集」・・・編者：全国社会福祉協議会
- ・厚生労働省HP・・・
- http://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/hukushi_kaigo/seikatsuhogo/seikatuhogo/



学内学会 学生企画アンケート用紙

本日は学内学会、学生企画へのご参加ありがとうございます。次回の学生企画をより良いものにするため、アンケートにご協力ください。該当箇所には○をお願いします。

- アンケート記入者情報
 - 社大生 (年) (2) 他大生 (年)
 - その他 ()
- 今回参加した企画の分野
 - 子ども (2) 高齢者 (3) 精神保健福祉
- 今回の事例検討会を通して、実際の支援についてのイメージが以前より明確にできましたか。
 - できた
 - まあまあできた
 - あまりできなかった
 - できなかった
- 本日の内容の難易度についてお聞かせください。
 - 難しかった
 - やや難しかった
 - ふつう
 - やや易しい
 - 易しい
- 今回の企画は満足できるものでしたか。
 - 大いに満足
 - まあまあ満足
 - あまり満足ではない
 - 満足ではない

企画への参加・アンケートへのご協力、誠にありがとうございました。